

創刊によせて

未来に残すべきもの

いのちを守る森の防潮堤推進東北協議会
会長 日置 道隆(輪王寺住職)

東日本大震災における人間の予測をはるかに超えた自然の猛威は、多くの尊い生命と財産をのみこみました。この悲劇を教訓に、私たちは今までの防災のあり方を根底から見直し、未来に向けてより安全に安心して暮らせるよう、今すぐ考え行動にうつさなければなりません。

横浜国立大学名誉教授宮脇昭氏、御年 85 才は、震災直後の 2 年前、生態学的知見に基づいた「いのちを守る森の防潮堤」を提案されました。昔の日本人は自然に感謝しつつも常に畏怖の念を忘れずに自然の共存共栄を心掛けてきたはずです。この構想は、まさにその精神を貫き通すものです。現代社会は、自然開発、産業・交通機関などの飽くなき建設が、技術の発展に後押しされ短期間かつ大規模に行われ、悲しいかな伝統ある文化はその轍に踏みにじられ失われてしまった感があります。

最近、どんな田舎に行ってもこれでもかと同じ光景に出くわし、画一的になってしまったことに気づくのは私だけではないでしょう。復興も同じ轍を踏んではいけません。私自身も恩恵に浴している科学技術をすべて否定するつもりは毛頭ありませんが、否定するとすればそのあり方に対してです。もともと自然と共に生きるべきはずの我々人間が、哲学不在の科学技術に手綱をまかせて自然の摂理から遠く離れ、自ら自然とのつながりまでも断ち切ってしまいました。ここに私たちが今日直面する、心も含めたさまざまな問題の根本原因があると私は思うのです。3 月 11 日の東日本大震災が私たちに残した最も大きな教訓は、人類には自然と調和し共生する以外の道はないということではないでしょうか。人類が生み出した科学技術は自然を支配するものではなく、自然と共に生きるための智慧として利用されてこそ意味があるのです。

遠い過去から遺伝子を介して連綿と引き継がれるご先祖様の心と生き様が、今日生きる我々の心と体に息づいています。過去から脈々と連なったご先祖様の意志が我々の行動となってつながり、世のあり方を方向づけているとさえいえるでしょう。ということは、即、自分自身を大切にすることにつながり、そこに他への優しい気持ちがあまれます。このたびの大震災でお亡くなりになられた皆様の気持ちを心に深く念じながら、幸いにして生き残った我々は、せめて自然と共存共栄する日本の価値観を生きたご先祖様の智慧に立ち戻って、被災地沿岸部の価値を本気で考え、次世代はもとより百年後・千年後に引き継いでいかなければなりません。そのためには、本来の地勢をもう一度見つめ直し、今を生きる私たちが何をすべきか真剣に考え、共に行動しましょう。宮脇昭氏が提案する「いのちを守る森の防潮堤」は、多くの生命をさらった波に立ち向かうための自然と共に生きる智慧の波であり、私たちはその根底にある哲学を共有することが大切なのです。

いのちを守る森の防潮堤推進東北協議会は、自然を活かしたしなやかな強靱さのある国土づくりに邁進いたします。多くの皆様のご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

●対談 「いのちを守る森の防潮堤」

宮脇昭先生、川口順子代議士と 相沢光哉宮城県議会議員、 そして、本川達雄先生乱入です！

日置：宮脇先生には森の防潮堤を始められたきっかけをお話したいと思っています。このことは真剣に真面目に取り組まなければならないことです。実現させなければいけないという使命がございます。ぜひ、皆さんとごつくばらんにお話しいただき、前向きに進めていきたい思いますのでよろしくをお願いします。

宮脇：これトップダウンでなければできないんですよ。

昨年（2012年）の1月に宮内庁が、どうしても天皇陛下が宮脇の話を知りたい。宮内庁は40分で、とのことでしたが、両陛下ともご熱心に聞かれ、時間超過をお許しいただきさまざまな事例を話すことができました（ご進講に使われた写真を示されながら）。

今回の災害は、最高の科学技術によって造られた建造物の予測を超えて2万人もの人を殺しているわけですよ。死んだ人は帰ってきません。今一番大事なのは、70億の人間が何があっても生き延びる方法です。例えばですね、日本人は4000年この方、鎮守の森をつくってきたのです。こういう本物の森。本物でなくてはダメなんですよ。本物とは長持ちするものでしょう！

国家プロジェクト、国民運動としてドングリを拾って植え本物の森をつくる。JR北海道では坂本社長以下が熱心に取り組んでドングリを植えて森づくりをしている。

ブラジルではそれまで廃材を焼いていたのです。今は廃材を埋めて、そこにいたみなさんで植えているわけですね。

ディズニーランドのある浦安市でも瓦礫を使いマウンドを築きましょうと。トップの松崎市長さんがやると言った。

私の提案では、毒は排除しなければいけない。しかし、根はエアレーションが非常に大事でございますから、マウンドを築いてコンクリートなどの瓦礫を埋めれば、根はそれを抱くわけです。

日本海側ですけれども、若狭湾では上越地震後、タブノキを植えています。今回の災害では、今しかできない今できることは「いのちを守る森づくり」だと思うのです。土地本来の「潜在自然植生」による森づくりなのです。主木群が深根性・直根性の森づくりなのです。

人間は飽きっぽい。2～3年経ったら問題が出る。そのときに何があっても限られた国土で9000年持つような「いのちの森づくり」を国家プロジェクトで行うべき。後は瓦礫その他のこともありますけど毒は排除しなければいけない。瓦礫を焼かないで、断続的でも良いから幅広のマウンドを築く。引き算する思考でなく問題が出たらそのとき対応すれ

ばいい。そういうのはトップダウンでしかできません。安倍政権が生き延びるためには9000年残る「いのちを守る森づくり」です。今しかできない、今の政府しかできないことなのです。

問題があればそのとき対応すればいいのです。今がチャンスなので官僚には、ぜひ、お願いしたい。

陛下には、9000年残るいのちの森、「平成の森」をつくりますと話しました。

相沢：昨年（2012年）の3月16日に発足をいたしました「いのちを守る森の防潮堤推進宮城県議員連盟」ですが、今日までの経過の中で、59名の県議会議員が自民党から共産党まで含めて、全ての会派議員が参加しました。過去に例がなかったと思います。そういう面でインパクトは十分あると思っております。これまでの経過の中で、私たちがお手伝いできたことは、岩沼市の「千年希望の丘」です。これをさらに充実させた形で発展させたいですね。太平洋岸の一部にそういうものをつくる。現実には20年経って見た場合、全くこちらが正しいんだということをその時代に認識してもらえば、かなり変わってくるとおもうのです。

政権交代したもんですから、自公政権の中では海岸堤防のつくり方を根本的に一から出直して、岩沼市の方法をとっても良いとも言っています。そのための法案もつくる、あるいは制度もつくる、予算も付けるというふうになれば違ってくると思います。

今、国土交通省がやろうとしていることは、太平洋岸に極端に言えば一律に7.2mの堤防を築くということですから、これは東海地震、南海地震で仮に30m近い大津波が発生したとしたら全く役に立たない。それを一生懸命やろうとしているわけです。気仙沼地域においては、これがさらに高くなりまして、11.4mまでかさ上げするコンクリートの防潮堤という方針が出されました。これは環境上も景観上も、まして海との共生、自然との共生ということからいっても大変な問題なので、県議会でも何度も取り上げました。

世界に発信する我国の防災のあり方として、極めて安直な土木工学的な手法にだけ頼ってしまうことは、決して評価されるものにはならないと思います。

問題は、特に環境アセスメントの手続きをとっていないので、将来日本の海岸線にこのような巨大な構造物を造った場合、地下水がそこで遮断されてしまい、生態学上あまりにも無頓着な進め方ではないかと。安田喜憲先生（東北大学大学院環境研究科教授）が再考を迫ったということですが、村井知事は今これを変更したら大混乱になるという回答だったそうで、安田先生も二の句が継げなかったとおっしゃっていました。

今、宮城県においては、岩沼市の「千年希望の丘」が「いのちの防潮堤」のコンセプトに沿った動きをしています。亘理町・山元町でも一部動きがあります。県全体としては私どもの力が及ばない面もありまして、このままではまさに万里の長城のようなコンクリート製の堤防が築かれてしまうことになりかねないと大変危惧しています。

日置：根本的なことなんですけど、環境問題、維持管理の問題、コンクリートの耐用年数、そのようなことについて強い主張をどんどんしていくべきだと僕なんかはおもうのですが・・・・・・・・

東日本大震災において生態学的知見を取り入れるということで、鷲谷いづみ先生（東京大学大学院農学生命科学研究科教授）も色々とお書きになっていますが、根本的な問題点というのは土木技術が先行して、生物とか命があまりにもないがしろにされていると僕は非常に感じております。

川口：宮脇先生がお書きになった本を頂きました。それを読んで非常に感心をし、すごい発想だなと思いました。それで議員連盟をつくり、昨年7月30日に現地を案内していただきました。

私たちは賛成をしていたのですが、実際に政府に話を聞きました。しかし、今、相沢先生がおつ

しゃったことと全く同じでございまして、それぞれ新しい発想には頭が向いていかない。従来通りの防潮堤あるいは防災林ということで考える――。

従来通りのマツとかそういう木を植えるということで、その域をどうしても出してもらえない。

国土交通省が頭を変えないと。予算を持っていますが、過去やってきたことが良いことだという発想がどうしても役人にはあります。それを変えるための動きをしていかなければならない。

日置:先日、国土交通省の海岸室長にちょっとお電話したのですが、ハイブリット工法の提案がありました。コンクリート堤防の陸側の法面に盛土をして、そこに土地本来の木を植えていこうということ室長さんから聞きました。

川口:ああ、そうですか。

日置:NEXCO 東日本管理事務所に伺いまして、仙台東部道路(高速道路)の法面に木を植えさせてほしいと要望しました。

仙台市の議会の方で提案しているのは県道を嵩上げて、その法面にぜひ植えさせて欲しい。それは仙台市の直轄事業ですから、結構いけるのかなと思っています。

「いのちを守る森の防潮堤」づくりにおいては、いろいろ応用が効くと思うんですね。居久根の形をとるのもよいでしょうし、林野庁の保安林の後背地、法面に植えると多重防御になる。それから汽水水域などは独特の重要な生態系がありますから活かさなければと思うので、その後背地に「いのちを守る森の防潮堤」をつくる。川沿いにはこのような森の防潮堤があるといったことでどんどん進めていく方が私には現実的だと思っています。

画一的にコンクリート防潮堤を造るなんて。こんなバカなことをやれば世界の笑いものになることは間違いないと思います。先進国の日本がこんな頭の悪いことをやってしまうんだと思われま。そんなことをやれば、そこに住む農業漁業の地域住民たちの生活全部がダメになります。そのようなことを行うのは、とんでもない話だろうと思うのです。私は国土破壊といっても良いと思います。

我々の方で苗木のことなどの実施体制はできています。前向きに地域の民を守るということでやっていただきたいと思います。人間が自然を自分の思うままにコントロールできるという今までの錯覚を見直す。そうではなくて自然というのは共存共栄して、自らが守れるという。そういった哲学の問題になってくるのです。

――100年、1000年の大きな経緯の中での合意形成というのが必要なのかなと思いますが.....。

相沢:おっしゃる通りで、気仙沼地域の実際そこで生活していかざるを得ない人たちと、怖いことを体験して、そこからエスケープするという立場の人との意識の差があるのです。

三陸沿岸の方は、今までも津波対策というのはしょっちゅうあったわけです。今回は正確に言うと400年ぶりというか、慶長津波に匹敵する大津波が発生してあれだけの被害を受けた。しかし仙台平野の住民は、ほとんどそこに住まないという前提で早く安全な策を講じてくれというニーズが強いのです。それで、国が示し、県が示し、あるいは自治体が示したその海岸堤防を早く整備してくれということになってしまうのです。

県議会での質疑を振り返っても国がこういう方針で来ているので、県としてはそれを粛々とやるだけですよ。もう選択の余地がないという考え方ははっきりと言うわけです。その背景にあるものは、今の法律や制度。まして予算などで配慮している面が全くゼロなわけですから、それをいくら良いものが必要だといわれても、行政としてそれを採択していくということにはならない。大変杓子定規な考え方です。根本的には法律改正が必要なんです。

これは長期的に見れば、今のやり方が間違いだということが判明されていくはずなのですが、今、私たちがやれることは、ある程度限定された場所であっても、岩沼市の「千年希望の丘」をさらに充実させた形で、太平洋岸の一部にそういうものをつくっていくということです。現実には20年経つ

てみた場合、これは全くこちらが正しいんだということをその時代に認識してもらえば、かなり変わってくると思うのです。現実には今の時点では、口酸っぱく言っても理解しようとしないう人、あるいは理解しようとしても制度・法律で動かない行政があり、そこを突破していくエネルギーは残念ながらないわけです。そのための法案もつくる。あるいは制度もつくる、予算も付けるというふうになっていけば違ってくると思いますけれども。

川口: 役人は今までのことをやっていけば安心だろうという意識はあります。

相沢: 特区のような形で、被災地の瓦礫を認めていくとか、あるいは防潮林、防災林のあり方として、土を盛ってそこに植栽して大きなこんもりとした森をつくる。「いのちを守る森の防潮堤」に対してはすごく頑ななんですね。これは私だけではなく同僚議員もかなり強く言っています。主張しているんですが、県は「国が国が、予算が予算が」と言って、今変えたら大混乱になると。そんなことばかりです。

日置: 我々の活動は未来へ向けた種まきですね。宮脇先生まだ生きています。あと20年先生は健在です。

宮脇: 日本人は口先の対応は上手いけれど、いわばトータルの科学的な知見、哲学がないですね。地域経済と共生する森は9000年残るいのちの森です。天皇陛下に「平成の森」をつくりますと話しました。

——突如、本川先生が飛び入り！

本川: 宮脇先生のご著書を読んで、ぜひ、やっていきたいと思いました。

今まで機械文明ばかりだったんですね！生き物を中心とした文明を考えないと危険です。見て安心感があるもの。つまり、緑ってなんたって目に優しいんですね。目って生物学的にそのようにできているんですよ。コンクリートではない。生物学的に考えた、社会のインフラをつくっていければ、これに越したことはない。

相沢: 本来、自然との付き合いが上手いはずの日本人が何故そのような発想にならないのか。本当に疑問ですね。

川口: どうしたら変わるんでしょう？

本川: やはり価値観をちょっと変えなきゃいけないんです。

機械的にバーンとつくる大量生産は安いんですよ！生き物との付き合いは結構時間がかかるんです。時間をかけて付き合わなきゃならないし、ある程度生き物にご機嫌とらなきゃいけない。我々の勝手にできるわけないですから、相手のご機嫌をとりながら一緒にやっていくという、少しこっちのわがままを抑えて一緒に生きるという考え方がないと生き物とは付き合えない。そのような発想にならないとね！遺伝子は永遠、身体は永遠ではない。コンクリートも永遠ではない。自分の個体の寿命だけで考えてしまうからコンクリートの方が長く持つと考えてしまう。

相沢: 法律のつまらない文言が、文化や文明を殺しているわけですよ。

日置: 前向きに考えていただいて、あきらめずに頑張りましょう。これは文明の問題です。我々の生きざま、未来に対して何をすべきか、未来の子どもたちに、次の次の世代の子どもたちにどのようなことをつないでいけるかが問われていると思います。

